

令和 5 年 6 月 30 日現在

機関番号：55401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2022

課題番号：20K21958

研究課題名(和文) 敗戦前後の「日本浪漫派」周縁の文学的営為に関する研究：『文藝世紀』を視座として

研究課題名(英文) A Study on the Literary Activities of the 'Nihon Roman School' before and after the War: Focusing on "Bungei Seiki"

研究代表者

福田 涼 (Fukuda, Ryo)

呉工業高等専門学校・人文社会系分野・助教

研究者番号：10880239

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本浪漫派系の雑誌「文藝世紀」と関わりを持つ文学者らが敗戦前後に著した作品を分析することで、当該時期における文壇の状況の一端を明らかにすることを試みた。具体的には、三島由紀夫や太宰治らの作品に内包されていた「文藝世紀」に対する批判意識を浮き彫りにするとともに、同誌とも密接な関係を有する学会未公開の資料について、調査・分析を実施した(については、成果の公表に向けて準備を進めている)。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、文学史上の死角となっている『文藝世紀』の再評価を行うと同時に、三島・太宰といった世代や文学的出自の異なる作家たちの営みを、同一の問題系のなかで考察した。その過程で、三島や太宰の創作が、その掲載誌である『文藝世紀』を批判・相対化する要素を内包していることが明らかとなった。また権利の都合上、現段階では詳述し得ないが、三島由紀夫に関する未公開資料を翻刻(完了済)するとともに、解題の執筆と公表の準備を進めている。

研究成果の概要(英文)：In this research, I tried to clarify a part of the situation of the literary world in that period by analyzing the works written by literary figures who were related to the Japanese romantic school magazine "Bungei Seiki" before and after the defeat of the war. Specifically, we will (1) highlight the critical awareness of the "Bungei Century" contained in the works of Yukio Mishima and Osamu Dazai, and (2) investigate and analyze unpublished academic materials that are closely related to the magazine. (Regarding (2), preparations are underway to publish the results.)

研究分野：日本文学

キーワード：文藝世紀 日本浪漫派 三島由紀夫 太宰治 高見順

1. 研究開始当初の背景

『日本浪漫派』とは、1935年に創刊された『日本浪漫派』の同人を主な構成員とする文学グループで、戦前の文壇における「古典回帰」の潮流を牽引し、「近代」や「西洋」に強い批判を投げかけたことで知られる。従来の「日本浪漫派」研究は、保田與重郎や亀井勝一郎といった、同派の中心となった作家たちを主要な考察対象として進められてきた。一方で、同派の周縁にいた作家や従属的なメンバーの営みについては、これまで十分な考察が施されてこなかった。また『日本浪漫派』やその母体『コギト』が特権的に扱われる傾向にあり、『日本浪漫派』の終刊前後に創刊された諸雑誌については、研究が手薄であった。

こうした状況を打開すべく、申請者は中河與一が主宰した『文藝世紀』と、同誌に関わりの深い文学者らの動向に注目した。『文藝世紀』は戦時体制に協力するとともに、匿名批評という形で旧左翼知識人らの中傷・告発した「悪名高い」雑誌であり、戦後は文壇の厳しい批判に晒され、主宰者の中河ともども、文学史の死角に追いやられた。

ただし、『文藝世紀』の同人や寄稿者の大部分は『日本浪漫派』の顔ぶれと重複しており、また個人が主宰する同人雑誌としてはきわめて異例ながら、敗戦直後まで命脈を保つこととなった。この意味において、『文藝世紀』は敗戦前後における「日本浪漫派」の動向を見極める上で重要な資料であると見做し得る。

2. 研究の目的

『文藝世紀』に創作が掲載されている三島由紀夫と太宰治、そして従来の文学史においては「日本浪漫派」の対立者として記述される高見順の文業を、『文藝世紀』という雑誌メディアとの関わりから検討する。こうした作業を通じて、「日本浪漫派」がその周縁の作家たちに与えた影響を具体的に解明し、従来の「日本浪漫派」像を刷新することが主たる目的となる。また一個の雑誌に注目するというメディア論的手法を導入することで、個別の作家研究という枠組みにおいて考察されてきた創作を、より広い文脈から捉え直し、その過程で「日本浪漫派」内部での思想的対立や、当時「糞リアリズム」と蔑称された『人民文庫』派に伏在していたロマン主義の問題といった、従来の文学史では十分に検討されてこなかった論点について検討することも狙いの一つである。

3. 研究の方法

前項「2. 研究の目的」に示した狙いを達成すべく、以下のような作業を実施した。

[1] 三島由紀夫『中世』(1945～1946年)の分析 掲載時期を手がかりに

『中世』は、陣中で薨じた愛息・義尚の死を悼む、足利義政の頹廢的な日々を物語る。本研究では、本作が『文藝世紀』に掲載された時期に注目した。作中で批判的に描かれる「死に魅せられた」義政の姿は、死の美学を説いた「日本浪漫派」論客のありようを強く想起させる。ただし終戦後「第4回」が『文藝世紀』に掲載された時点(1946年1月)で、生き永らえた三島は夭折した義尚ではなく、むしろ義政の側に回っている。こうした戦前・戦後の断絶が、作品にどのような影響を与えたのか、雑誌『人間』に掲載された「第5回」以降の展開や、三島由紀夫文学館(山梨県南都留郡山中湖村)所蔵の未定稿を視野に入れつつ検討した。

[2] 太宰治『不審庵』(1943年)の分析 落語『茶の湯』受容を手がかりに

太宰と「日本浪漫派」の関係については少なからぬ研究の蓄積があるが、太宰と『文藝世紀』の関係については、服部康喜氏の論考「「一燈」」(『太宰治研究 6』和泉書院、1999年)以外には、詳細な論及がない。従来の太宰研究は『不審庵』を含む通称「黄村先生もの」から、同時代思潮に対する作者の諷刺を読みとっている。申請者は分析の過程で、『不審庵』が古典落語『茶の湯』を下敷きにしていることを突き止めた。これを踏まえつつ、本作の「笑い」がどのように構築され、また『文藝世紀』という媒体において、どのような機能を果たしているか考察した。

[3] 高見順『今ひとたびの』(1946年)の分析 『天の夕顔』利用を視座として

高見は『日本浪漫派』と対立していた『人民文庫』の旧同人であり、戦後の著作において高見は『文藝世紀』を名指して非難している。一方で、高見が戦中『文藝世紀』に寄稿していた事実は見逃せない。また「転向」経験者である人妻との悲恋を描く『今ひとたびの』は、(1)人妻への精神的な愛を主題とする、(2)逢瀬を果たす直前にその人妻が死去する、(3)巻頭に和泉式部の和歌を置く、という三点で中河與一のベストセラー『天の夕顔』(1938年)と一致する。当該時期における『天の夕顔』の知名度に鑑みても、これを単なる偶然とは見做し難い。以上の背景を踏まえて作品を分析することで、高見の『天の夕顔』利用の実相と、その文学史的意義を解明することを試みた。

4. 研究成果

前項「3. 研究の方法」の記述に則して、以下、本研究から得られた成果について報告する。

[1] 三島由紀夫『中世』(1945～1946年)の分析 掲載時期を手がかりに

三島由紀夫文学館において、『中世』の異稿を含む、複数の直筆原稿を調査した。権利の都合上、現段階ではその結果を詳述できないが、本作に対する従来の位置付けを、一部修正する必要があることが判明した。現在、こうした成果を作品それ自体の分析と統合する形で、口頭発表・論文執筆の準備を進めている。

また本研究が扱う時期における三島の文業に強く関連する未公開資料を、偶々閲する機会を得た。当該の資料についても、まだ詳細は明かし得ないが、既に翻刻と基礎調査は完了しており、2023年度中に然るべき媒体で、解題と併せて公表する予定である。

なお関連する業績として、浜崎洋介著『三島由紀夫 なぜ、死んでみせねばならなかったのか』(NHK出版、2020年)の書評を『三島由紀夫研究』第21号(鼎書房、2021年)に、また佐藤秀明著『三島由紀夫 悲劇への欲動』(岩波新書、2020年)の書評を『日本近代文学会関西支部会報』第33号(日本近代文学界関西支部、2021年)に寄稿した。これら2篇の書評の執筆を契機として、従来三島の「右傾化」や「ロマン主義への回帰」の端緒を開いた小説と位置付けられてきた『憂国』(1961年)を、むしろ「ロマン主義批判」という文脈から捉え直すことが可能となった。

[2] 太宰治『不審庵』(1943年)の分析 落語『茶の湯』受容を手がかりに

先にも記したとおり、『文藝世紀』の誌面(六号欄)には、左翼陣営に属していた文学者らに対する誹謗中傷や、戦時体制に対してあからさまに迎合する記事が数多く掲載されていた。「黄村先生もの」の一編である『不審庵』において、確かに「黄村先生」の言行、とりわけ古典落語『茶の湯』を想起させる彼の過剰な「形式主義」的な振る舞いが、「笑い」の対象として描き込まれている。その一方で、語り手である「私」自身についても、複数の水準において、その言動が読み手にとって「笑い」の対象となるように仕組まれている。こうした『不審庵』における「笑

い」の構造が、『文藝世紀』のいわば鯨張った「形式主義」や、論敵に対する一方的で冷たい「嘘い」を相対化していることが明らかとなった。こうした成果をまとめるべく、[1]の『中世』論と同時並行的に、論文の構想を進めている。

[3] 高見順『今ひとたびの』(1946年)の分析 『天の夕顔』利用を視座として

本作については、([1]に記した未公開資料の調査・分析を優先したこともあり)実質的に調査・分析作業が停滞してしまっている。管見の限りでは、尾崎名津子「高見順『今ひとたびの』の諸本 メリーランド大学プランゲ文庫所蔵本を中心に」(『弘前大学国語国文学』41号、2020年)を数少ない例外として、『今ひとたびの』は高見順研究においても言及されることの稀な作品であり、本作に関する同時代言説を渉獵・整理してゆくことが必要となる。そうした過程で見出された、角川文庫版『今ひとたびの』(1956年)に付された平野謙の「解説」は、本作と中河與一『天の夕顔』が類似している旨を指摘している点で重要である。

また『天の夕顔』については、山崎豊子が『婦人公論』に連載した小説『花宴』(1968年)において「盗用」(ただしその実態については、詳細な検討を要する)されたことでも知られるが、『天の夕顔』それ自体についても、同作のモデルとなった不二樹浩三郎との間で確執が発生しており、またギュスターヴ・フローベール『感情教育』(1869年)を下敷きにした形跡が見えるなど、事態は錯綜している。

今後、こうした問題点を整理・統合する形で、『今ひとたびの』の分析を進めるとともに、同作を敗戦前後の文学状況に再配置することを試みる所存である。

[4] その他

本研究に関連する成果として、三島由紀夫の短編『孔雀』(1965年)、ならびに太宰治と同じく『海豹』・『日本浪漫派』の同人であった木山捷平の小品『苦いお茶』(1962年)について短文の解題を執筆した。このうち前者については、三島が日本浪漫派に対する訣別の書として著した『夜の車』(1944年)と晩年の「行動」の理論的根拠としての性格を有する評論『太陽と鉄』(1965~1968年)の結節点として位置付けられることの指摘を含むものであり、後者については研究が停滞している木山捷平研究に貢献すべく、同作が内包している問題性を、他の木山作品と関連付けながら指摘するものであった。当該の解題については、2021年に刊行が予定されていたあるアンソロジーに掲載される予定であったが、(主として版元の都合により)出版が大幅に延期となっている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

福田涼「浜崎洋介著『三島由紀夫 なぜ、死んでみせねばならなかったのか』」、『三島由紀夫研究』第21号、鼎書房、2021年4月、pp.146-147
福田涼「佐藤秀明著『三島由紀夫 悲劇への欲動』」、『日本近代文学会関西支部会報』第33号、日本近代文学界関西支部、2021年5月、pp.6-7

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------